

## 第7回日銀グランプリ決勝大会 審査員講評

審査員長 西村 清彦 (日本銀行副総裁)

審査員 高須 武男 (経済同友会副代表幹事、  
バンダイナムコホールディングス 取締役相談役)

秋池 玲子 (ホストコンサルティンググループ パートナー兼マネージングディレクター)

森本 宜久 (日本銀行政策委員会審議委員)

白井 さゆり (日本銀行政策委員会審議委員)

### 1. 総評

日銀グランプリは、今年で7回目の開催です。本年は全国から108編の論文が寄せられました。東日本大震災からの復興、電子マネーやスマートフォンといったIT技術の活用など、話題性に富むテーマも目立ち、バラエティが広がっています。また、提言の深みという点でも年々レベルアップしているように思います。

特に、この場に臨んだ5チームの提言では、わが国の金融に関して問題意識を持ったうえで、アンケート調査や金融の実務家への聞き取り調査などを行っていました。頭でっかちになり過ぎず、地に足の着いた視点から独自の提言に結びつけている点は、高く評価できると思います。

また、本日のプレゼンテーションにも、自分たちのメッセージを聞き手に伝えるための創意工夫がみられました。審査員から厳しい質問を受けても、しっかりと自分たちの主張を展開していました。将来の日本を担う若者として大変頼もしく、また嬉しく思いました。

ただ、今回の様々な提言を聞いていて、気になったことが2点あります。IT技術の利用に際しては、自分達を含めた個人情報保護が非常に重要であるという点について、少々意識が希薄ではなかったか、という点です。もうひとつは、政府・公的セクターの関与によって問題解決が図られる場合にも、そこには相応のコストが発生し、最終的には納税者の負担になるということについて、より強く意識すべきではないか、ということです。

さて、世界的な金融危機を受けて、多くの国で金融教育を重視する動きが高まっています。グローバル経済を生き抜くうえでは、金融、外国語、ITリテラシーは必須の要素と言っても過言ではありません。この日銀グランプリをきっかけとして、金融の問題について自分たちで深く考えた経験は、学生の皆さんの糧になったと確信しています。皆さんには、将来どんな道に進むにせよ、ぜひとも金融に関心を持ち続けてほしいと思います。

## 2. 個別の論文について

### 【最優秀賞】東京経済大チーム

#### 『「下3ケタ投資」が日本を救う！～グリーンファンドが照らす未来～』

東京経済大学チームの提言は、預貯金口座の端数下3ケタの資金を定期的かつ自動的に投資ファンドに振替えることにより、集まった資金を自然エネルギー事業に振り向けるというものです。

まず、投資資金の小口化により幅広く資金を集めようとするコンセプトは珍しくありませんが、実現手法に学生らしい斬新さを感じました。すなわち、預貯金口座に常時残る「下3ケタ」の端数を、手間を省いた「自動振替」により投資に振り向けるスキームです。これは、既存の金融機関のシステムを利用して比較的容易に実現できる可能性があるように思いました。投資先としてグリーンファンドが例示されていますが、現実に応用するうえでは、さらに多様な選択肢にも発展しうる提案だと思いました。

さらに、IT技術を活用して、マイページ機能により投資家・ファンド間の双方向のコミュニケーションを充実させるとの提案もこの仕組みへの参加インセンティブを維持するうえで、効果を有するものと思われまます。

本提言ではプレゼンテーションが説得的であることに加えて、質疑応答も含めて、自分たちの主張が首尾一貫していたことも好感が持てました。本日の説明では触れられていませんでしたが、自分たちのアイデアの有効性を一般消費者や学生に対するアンケート調査によって裏付けようとする取組みがなされています。これは提言の説得性を高める工夫として、高く評価できると思います。

なお、さらに提言をより説得力のあるものにするためには、例えば、提案の仕組みの利用拡大をどのように図っていくのか、という点や提案の実現にかかるコストについて、さらに検討を深めれば良かったのではないかと、思います。

### 【優秀賞】愛知教育大チーム

#### 「先生のための金融教育（小学校編／中高編）」

愛知教育大学チームの提言は、将来の学校教育を担う教育学部チームらしく、教育学部の学生に向けた効果的な金融教育プログラムの導入を提言するものです。

現代社会において、金融・経済の様々な問題を理解しながら健全な生活を維持していくうえで、金融リテラシーの向上は一段と重要になってきています。そうした中、まずもって必要なことは、将来、児童・生徒に金融教育を指導する立場に立つ教育学部の学生が、十分な金融・経済の知識や金融教育のノウハウを身につけることです。今回の提言の前提にあるこうした問題意識は、極めて正当なものであると思います。

今回の提言は、そうした問題意識の下で、自分たちの置かれた状況を地道に分析するところから出発しています。すなわち、手間を厭わず、周囲の学生さん達にアンケート調査を実施した結果や自分達が先生のために開かれた外部セミナーに参加した経験に基づいて提言を行っています。こうしたやり方は、提言の説得性を高める工夫として高く評価できると思います。

提言の内容を大掴みに言えば、まず自分たち教育学部の学生が「金融・経済の知識に触れる機会が少ない」という認識が示されています。そのうえで、より実践的な金融教育のノウハウや、経済時事問題を考える機会を増やすべきとの考え方に立って、具体的な講義プログラムを提案しています。また、質疑応答を通じて、金融教育において児童・生徒に何を教えるべきか、そのために自分達はどのような知識を身につけるべきか、といった点について主体的に考えていこうという姿勢がうかがわれ、好感が持てました。

こうした「実践的教育の必要性」という主張には一理あるものと思われます。ただ、それが「経済学や金融論に関する基礎的知識の習得を省略しても良い」という考え方に結びついてしまうと問題があると思います。児童・生徒に対して、必要な金融リテラシーを正しく伝授するためには、それを指導する先生方が、経済学や金融論に関する基礎的知識と金融教育の実践的ノウハウの双方に通じていることが重要であるということ強調しておきたいと思います。

## 【優秀賞】明治大チーム

### 「ソーシャルマネー・システムの構築 ～よりよい社会を目指して～」

明治大学チームの提言は、社会貢献活動への資金供給のための新たな仕組み作りです。すなわち、マッチングギフト制度に基づく寄付システムやソーシャル・ファイナンスに基づく低利融資のシステムを構築し、普及させようというものでした。

まず、今回の提言のプレゼンテーションは、寸劇風の演出がなされていたり、社会貢献活動の現場の雰囲気伝える架空の動画を示したりするなど、非常に印象的であり、自分達の主張を伝えていく上で効果的であったと思いました。

提言の内容については、寄付や低利融資のシステムを構築するに当たり、人々の社会貢献の気持ちの高まりと企業や金融機関におけるCSR活動を結びつけることによって、より効果的な仕組みを作りだそうとしていることに、ひとつの工夫を感じました。

また、昨今のIT技術の進展の成果を積極的に活用しようとしている点も学生らしい発想と感じました。例えば、携帯電話等を利用した電子マネーによる買い物の際に自動的に寄付が行われる仕組みがそのひとつです。さらに、インターネットを通じた情報通信によって、寄付等を行う主体とそれを受ける社会貢献事業主体と間の情報共有を深めるといった仕組みは、人々の社会貢献へのインセンティブを強めたり、社会貢献事業主体の活動の規律を維持したりするうえで効果的であるように思われます。

一方、提言されているような仕組みの実現可能性や社会全体およびスキームに参加する企業の費用と便益のバランスについては、より踏み込んだ分析・検討があれば良かったと考えます。

とりわけソーシャル・ファイナンスに関しては、人々の善意や社会貢献に全面的に依存して、社会的リターンのみを追求する仕組みを提案していますが、それを実現する方法について具体的な検討があれば良かったと思いました。また、金融機関として、収益性が低く、リスクの高い社会貢献事業への融資をどうマネージしていくか、という視点があると提言の説得性が高まるように思いました。

### 【敢闘賞】東京大チーム

#### 「東北フロンティアバンク ー支援から手を取り合った成長へー」

東京大学チームの提言の狙いは、個人マネーを幅広く取り込み、東北での新規事業に必要な資金を供給して、東北復興に役立てて行くということだと思います。提言は、東北の被災地への関心を高く保つためにどのような仕組みを導入すべきか、という問題意識に基づくものであり、この点は共感を覚えました。

ただ、提言の中で示されている一事業あたり 1000 万円、総事業費 1 億円といった金額が、提言者の問題意識に見合った規模なのかどうかという点は、さらなる検討が必要だと思われました。

また、提言における東北フロンティアバンクの機能や役割が、民間金融機関や既存の政策金融機関とどのように異なるのか、また、政府による信用補完の活用についてどのように考えるのかといった点で、もう少し提言内容を明確にする必要があるように感じました。

### 【敢闘賞】東京大・京都大チーム

#### 「中小企業向け融資電子入札システム（Fe-BID）の導入」

東京大学・京都大学チームの提言は、信用保証制度の新たな活用の仕組みとして、入札システムの導入により、金融機関の競争的な貸出機会の増大と中小企業の金利負担の軽減を実現しようとするものです。

現状を分析する手法として、書籍やインターネットによる情報だけでなく、信用保証協会や関係行政庁の実務家に直接ヒアリングを実施していることは、地道な取り組みとして評価できると思います。

しかし、提言されている方式において、信用保証協会に提言が期待するような審査機能をどのように発揮してもらうかについては、必ずしも明確な検討がなされていないように思われました。そうした点を検討するうえでは、信用保証制度を利用する当事者の一方である民間金融機関サイドからも生の声を聞いてみるのが有益であったかもしれません。

### 3. おわりに

日本銀行では、来年度も日銀グランプリを開催する予定です。本日決勝に進出された皆さんのように、一人でも多くの学生の方々が、若者らしい問題意識に基づき、自ら主体的に考え、自分の足で調べることを通じて、金融面の課題に挑戦していただきたいと思います。

以 上